琉球大学学術リポジトリ

各種報告

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002019844

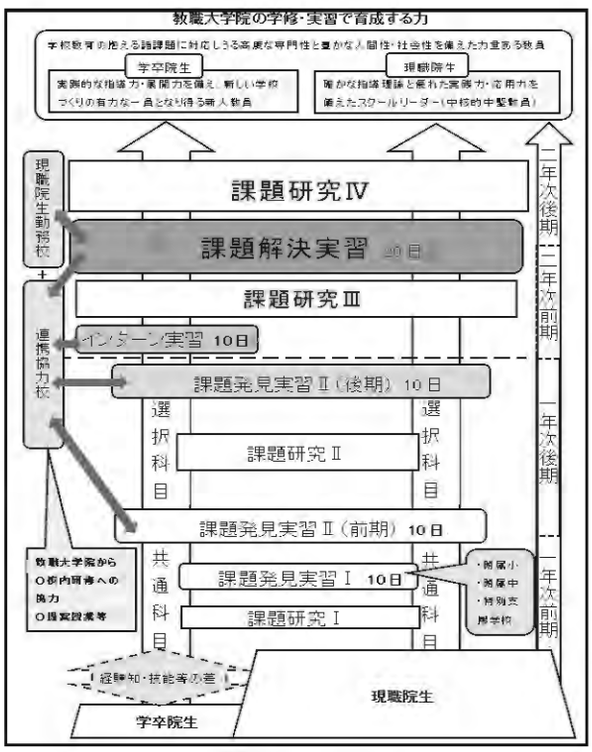
実習の成果と課題
―協働を通した実習―

琉球大学教職大学院　実習委員会

1．共通・選択科目及び課題研究Ⅰ～Ⅳとの融合

１年次の課題発見実習Ⅰ／ⅠA･ⅠB は，共通科目，課題研究Ⅰと並行して非連続の実習に取り組む。共通科目での学びと実習での学びが課題研究Ⅰ／ⅠA・ⅠBを中心に統合される。課題発見実習Ⅱでは，後期の選択科目の学びが実習で実践できるよう課題研究とのつながりも強くなった。

２年次は１年次で検討された研究課題を基に課題解決実習と課題研究Ⅲ・Ⅳに取り組んだ。課題解決実習を行う院生の勤務校及び連携協力校でのリフレクションに加えて，課題研究Ⅲ・Ⅳで，課題解決実習で多様な大学教員を交えて省察し，課題への解を具体化する等の学修を重ねた。



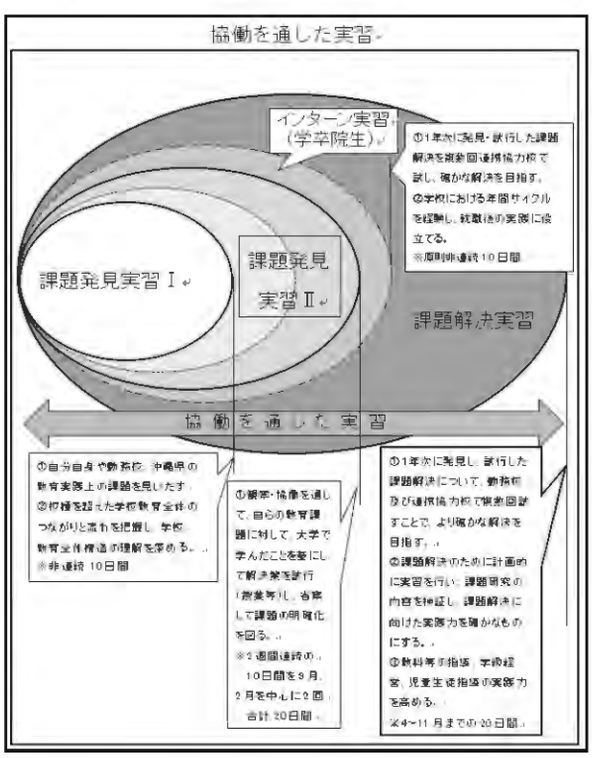
2．連携協力校との協働の充実

課題発見実習Ⅰ／ⅠA･ⅠBは，１年次前期の院生の研究課題を基に観察実習を中心として異なる校種で行った。観察を通して個を見取ることに主体を置き，全体でのリフレクションやグループ協議による意見交換を行った。また，校種間の共通性および違いについての視点も踏まえ，自分自身や沖縄県の教育実践上の課題について考えた。

課題発見実習Ⅱでは，コロナ禍にもかかわらず学校現場での適切な対応により，ほぼ計画通りに進んだ。９月と２月に、別の学校で２回の実習を実施することにより，自己の課題についてより多角的に分析することができた。

学卒生によるインターン実習では，年度当初の多忙な業務の分担と協同を実践し，事務作業や年度当初の行事などで実習校教員の負担軽減に貢献した。院生も学校業務としては見えにくい部分を体験し，年度初めの担任の心境や教員としての心構え等について実感した。

課題解決実習では，院生自身の課題対応のみならず，授業実践や大学教員とのリフレクションが連携協力校の教員の参考となる場面もあり，また，連携協力校自身の課題や現状を再確認する機会にもなり，そのことが教職員の個々の授業改善や学びにもつながり，管理者からも好評価を得ている。



ＦＤ委員会

ＦＤ委員会は，今年度，委員会を延べ７回開催し，①相互授業参観，②学生による授業評価，③学生アンケートの実施，以上の３点を中心に活動を行った。
＊ＦＤ委員：上間陽子，田中洋，多和田実。

１．相互授業参観・授業公開

毎年前学期後学期の各２週間，教員が相互に授業を参観し，その結果を授業改善に活かすとともに，広く授業を公開することにより，本専攻の教育活動の周知とその改善に努めている。しかし，本年度は，新型コロナ感染拡大防止のため，前学期・後学期ともに専攻内での授業参観及び教育学部教員のみに限った授業公開を実施した。前学期は 2022 年６月２日（木）～15 日（水）の実習日を除いた７日間で延べ 20 名が参観し，後学期は 2022 年 12 月５日（月）～16 日（金）の学校推薦型選抜等による休講日を除いた９日間で延べ 14 人が参観した。昨年度も新型コロナ感染拡大の影響で，後学期のみ専攻内での授業参観だけを実施し延べ 16 名が参観したが，今年度の参観者については，前学期はそれを上回ったものの，後学期はそれを下回る結果に終わった。特に後学期は，直前の告知となってしまい，専攻会議での事前確認もできなかったため，専攻メンバーへの意識喚起が不十分となってしまったことが，参観者数が低調に終わった原因の一つと考えられる。昨年度までで最低１人１回の参観が定着してきていることがうかがえたが，やはり事前の告知は常に丁寧に行わなければならないと改めて認識させられた。

アンケートには参観者がほぼ全員回答しており，その内容は，参考になった点に加えて，改善点等についても具体的に記されているものが少なくなかった。それらに対応したまとめを各授業者が作成することにより，本授業参観が，自己の教育活動を検証するうえで一定の役割を果たしていると考えられる。

２．学生による授業評価

（１）授業評価の項目や方法

教育学部では教育活動に係る全学的な授業の点検評価に関して，教師が持つ教育力の自己点検と自律的な向上を目指して 2006 年度から「授業評価アンケート」を導入し，2022 年にコロナ禍における影響をみるために項目の修正等を行った新「授業評価アンケート」を実施しているが，教職大学院教員も 2016 年度以降，これに参加している。この「授業評価アンケート」は，共通項目からなる授業改善のための５つの観点（１シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった，２使用した教材は適切であった，３教員の説明はわかりやすかった，４理解を促すための方法上の工夫がよくされていた，５総合的に判断してこの授業に満足している）で構成され，それについて受講学生・院生は５つの観点（全くそう思わない，そう思わない，どちらとも言えない，そう思う，強くそう思う）で回答する形式だった。新授業評価アンケートにおいては，上記に加えて，「授業の目標，内容の理解のため，授業中は深く考え，自分なりの問いを立てることができたか」（項目５に変更，それにともなって授業の総合的満足を問う項目が９に移動）の項目が加わった。教職大学院では，アンケート結果を受けて，各授業担当者が今年度の総括及び次年度の改善点などについて考察する「リフレクションシート」を作成している。

（２） 実態

次表が 2021 年度後期授業の共通質問項目の平均点となっている。ほとんどの授業において平均が４から５で推移しているが，「特別支援教育・地域支援の理論と実践」の一部項目で４を下回る評価があるなど，授業の改善にむけて努力が必要とされる結果となった。自由記述欄には「シラバスや時数の管理，見通しが持てたらもっとよかったと思います。また，夜遅くまで残ったり，授業準備の時間が他の講義に比べて極端に長く，他のことを犠牲にしてしまうこともあった為，そこは改善して頂きたいです」

「水曜日の 5 校時の授業でしたが，18 時～21 時に，地域の子供と交流をもつことがあった。子供との交流なので，夜になることはあると思いますが，時間が遅く少し大変でした」といった内容があったので，アンケートに記述された内容を精査し今後の授業改善に役立てたい。また，2022 年度前期科目は，「強くそう思う」「そう思う」の合計で見たところ，おおむね高い満足度であるが，一部の科目で 50%から

2021年後学期アンケート						
	回答数	1	2	3	4	5
授業分析・リフレクションの理論と実践	9	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
言語活動と協同学習	6	4.5	4.7	4.3	4.5	4.7
授業づくりの理論と実践	7	4.3	4.3	4.4	4.6	4.4
学習指導のための教材・教具の開発と活用	7	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
活用力としての教科外活動	3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
授業実践力向上の基礎	6	4.2	4.0	4.5	4.5	4.3
いじめ問題への対応と課題	5	4.0	4.8	5.0	5.0	5.0
こども支援のための地域・保護者との協力関係づくり	1	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
特別な支援を必要とするこどもの理解と実践	5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
新時代こども支援活動	5	4.6	4.8	4.6	4.4	4.6
校内研究組織の実践と課題	8	4.5	4.6	4.5	4.5	4.5
組織的意思決定マネジメント	2	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
教師の成長とメンタリング	2	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0
学校マネジメント	6	4.8	5.0	5.0	4.8	5.0
特別支援教育の教育課程・授業特論演習	1	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
特別支援教育・地域支援の理論と実践	2	2.5	4.0	4.0	4.0	4.0
課題研究Ⅱ	17	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6
課題研究Ⅳ	22	4.7	4.7	4.8	4.7	4.9

2022年前学期アンケート							
	回答数	1	2	3	4	5	9
教育課程編成の課題と実践	17	100.0	76.5	88.2	70.6	94.1	94.1
指導と評価の課題と実践	16	93.8	87.5	75.0	75.0	87.0	81.3
教授・学習の課題と実践	17	100.0	100.0	88.2	100.0	100.0	100.0
思考・判断・表現力育成の課題と実践	16	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
生活指導・生徒指導の実践と課題	16	93.8	93.8	100.0	100.0	100.0	100.0
学校不適応への実践と課題	16	100.0	93.8	100.0	93.8	100.0	100.0
学級経営の実践と課題	16	100.0	93.8	93.8	100.0	100.0	93.8
学校改革の実践と課題	16	100.0	93.8	81.3	81.3	93.8	93.8
学校教育・教員のあり方の課題と実践	16	100.0	100.0	93.8	87.5	100.0	93.8
沖縄の学校と社会	16	100.0	93.8	93.8	87.5	100.0	100.0
特別支援教育特論	3	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
課題研究Ⅰ	13	92.9	64.3	64.3	57.1	92.9	78.6
課題研究Ⅲ	12	91.7	83.3	83.3	75.0	83.3	83.3
特別支援システム論	3	66.7	66.7	66.7	100.0	100.0	100.0
課題研究Ⅰ（特別支援教育）	2	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
課題研究Ⅲ（特別支援教育）	1	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

60％台の満足度となっているため，アンケートに記述された内容を精査し今後の授業改善に役立てたい。

３．学習成果把握のための教職大学院生を対象としたアンケート調査

本教職大学院では，学習成果，効果を把握する１つの手立てとして，学生に対して定期的に教職や教職大学院に対する意識調査，集団の変容を分析している。調査時期は，基本的に入学直後（事前調査）と２年次の修了直前である。質問は，「専門教科（主に中・高）あるいは最も興味のある分野の力量認知（主に小）」について７件法（「まったく有していない」「あまり有していない」「どちらかというと有していない」「平均的な力量である」「どちらというと有している」「まあまあ有している」「とても有している」）で回答する１項目と５件法（「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「まあまああてはまる」「とてもよくあてはまる」）で回答する 40 項目（修了時は 44 項目）から成る。昨年 2021 年度末に修了した５期生の結果は右表の通りである。

本専攻の教育目的「学習指導力」「生活指導力」「組織運営力」の向上と照らし合わせながら学習成果をみると，次のような顕著な傾向が見て取れる。第１に「学習指導力」については，「専門教科（主に中・高）あるいは最も興味のある分野の力量認知（主に小）」に対する質問に，「力量を有している」と回答した者が，28.6％から 72.5％へ約 2.5 倍増加している。また，「7.教材についてその背景まで論理的に理解できる」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が，19％から 66.7％に 3.5 倍以上の伸びを示している。さらに，「13.学習指導に関して自信をもっている」という質問に対しても，「あてはまる」と回答した者が，38.1％から 61.9％へ大幅に増加している。

第２に「生活指導力」については，「2.子ども理解にすぐれている」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が，47.6％から 76.2％へ上昇し，４分の３以上が肯定的な自己評価をしている。また，「24.生徒指導に関して，個や集団を指導するための手立てを理解している」という質問に対しては，61.9％から 80.9％に増加しており，もともと自己評価が高いとはいえ実に８割以上の学生が肯定的に答えている。

さらに，第３の「組織運営力」についても，「30.校内においてリーダー的な役割を果たしている」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が，28.6％から 42.9％へ着実に向上している。

以上を踏まえたうえで，最後に専攻の教育目的から改めて結果を見てみたい。本専攻は，「学習指導場面，生徒指導場面，組織運営場面を通じて合理的かつ反省的に考えて問題解決ができる人材を育成すること」を教育目的としている。これに対する学習成果・効果としては，まず，「31.高い専門性を有している」という質問に対して「あてはまる」と回答した者が，28.6％から 71.4％へとほぼ 2.5 倍も増加していることが重要である。また，「1.さまざまな課題に対して，適切に対応することができる」及び「6.さまざまな課題に対して臨機応変に対応することができる」というそれぞれの質問に対して「あてはまる」と回答した者が，前者は 52.4％から 85.8％へ増加し，後者も 52.4％から 66.7％へと着実に増えている。

これらの結果から見ると，大学院生の主観的評価であることを十分に認識しつつも，本専攻の教育目的は，一定の成果を得ているといえるであろう。

４．その他

依然としてコロナ禍にあるため，多人数が一堂に会するようなＦＤは控えざるを得なかったが，2022 年７月 20 日（水）に前期科目「沖縄の学校と社会」で行われた沖縄県教育長による講演会を，ＦＤ研修としても実施した。教職員 15 名が参加し，「沖縄県の教育の現状と課題について」の演題のもと，教育行政の取組や課題についての講話及び質疑応答が行われ，本県教育に対する見聞を深める機会となった。

また，2022 年 12 月 23 日（金）に教員養成評価機構がオンラインで開催した「教職大学院認証評価実施説明会」を，ＦＤ研修として実施した。当日は８名が参加し，2023 年度に予定される本学の次回認証評価受審に向けて，認証評価における評価基準や自己評価書の作成，実施方法等について理解を深めた。

5期生アンケート　＊すべての質問項目について、上段は入学時（2020年7月）・後段は修了時（2022年2月）、の回答

	まったく有していない		あまり有していない		どちらかというと有していない		平均的な力量である		どちらかというと有している		まあまあ有している		とても有している		未記入	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
専門教科・最も興味のある分野の力量	1	4.8	0	0	1	4.8	5	23.8	5	23.8	1	4.8	0	0	8	38.1
	1	4.8	1	4.8	0	0	2	9.5	10	47.6	4	19	1	5.9	2	9.5

	まったくあてはまらない		あまりあてはまらない		どちらでもない		まあまああてはまる		とてもよくあてはまる		未記入	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1.さまざまな課題に対して、適切に対応することができる。	1	4.8	3	14.3	6	28.6	11	52.4	0	0	0	0
	0	0	1	4.8	2	9.5	17	81	1	4.8	0	0
2.子ども理解にすぐれている。	0	0	0	0	11	52.4	10	47.6	0	0	0	0
	0	0	0	0	5	23.8	15	71.4	1	4.8	0	0
3.自己成長を意識している。	0	0	0	0	4	19	12	57.1	5	23.8	0	0
	0	0	1	4.8	0	0	10	47.6	10	47.6	0	0
4.他の教員が困っていたら支援することができる。	0	0	2	9.5	5	23.8	14	66.7	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	15	71.4	6	28.6	0	0
5.地域の教育課題について理解している。	0	0	5	23.8	8	38.1	8	38.1	0	0	0	0
	1	4.8	2	9.5	7	33.3	11	52.4	0	0	0	0
6.さまざまな課題に対して、臨機応変に対応することができる。	0	0	6	28.6	4	19	11	52.4	0	0	0	0
	0	0	0	0	7	33.3	11	52.4	3	14.3	0	0
7.教材についてその背景まで論理的に理解できる。	1	4.8	4	19	12	57.1	4	19	0	0	0	0
	2	9.5	1	4.8	4	19	13	61.9	1	4.8	0	0
8.児童生徒の既習の定着度合いを把握している。	0	0	3	14.3	9	42.9	8	38.1	1	4.8	0	0
	0	0	0	0	3	14.3	16	76.2	2	9.5	0	0
9.学習に対する子どもの考えを客観的かつ共感的に理解することができる。	0	0	1	4.8	7	33.3	11	52.4	2	9.5	0	0
	0	0	0	0	0	0	17	81	4	19	0	0
10.学級という集団のマネジメント力を有している。	0	0	5	23.8	9	42.9	7	33.3	0	0	0	0
	0	0	2	9.5	7	33.3	12	57.1	0	0	0	0
11.時代の変化に適切に対応することができる。	1	4.8	2	9.5	4	19	14	66.7	0	0	0	0
	0	0	1	4.8	3	14.3	14	66.7	3	14.3	0	0
12.同僚との関係がよい。	0	0	0	0	1	4.8	13	61.9	7	33.3	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	10	47.6	9	42.9	0	0
13.学習指導に関して自信をもっている。	1	4.8	5	23.8	7	33.3	8	38.1	0	0	0	0
	1	4.8	2	9.5	5	23.8	13	61.9	0	0	0	0
14.教えることよりも、子供の学びを重視している。	0	0	2	9.5	6	28.6	11	52.4	2	9.5	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	11	52.4	8	38.1	0	0
15.企画力を有している。	1	4.8	3	14.3	10	47.6	6	28.6	1	4.8	0	0
	0	0	1	4.8	5	23.8	14	66.7	1	4.8	0	0
16.自己研鑽に努めている。	0	0	0	0	8	38.1	10	47.6	3	14.3	0	0
	0	0	1	4.8	1	4.8	11	52.4	8	38.1	0	0
17.何事に対しても探求心がある。	0	0	2	9.5	6	28.6	11	52.4	2	9.5	0	0
	0	0	1	4.8	1	4.8	12	57.1	7	33.3	0	0
18.広い視野を有している。	0	0	2	9.5	8	38.1	10	47.6	1	4.8	0	0
	0	0	1	4.8	3	14.3	17	81	0	0	0	0
19.幼児・児童・生徒への愛情をもっている。	0	0	0	0	1	4.8	12	57.1	8	38.1	0	0
	0	0	0	0	0	0	10	47.6	11	52.4	0	0
20.授業を振り返り、次時の指導に生かしている。	0	0	1	4.8	5	23.8	14	66.7	1	4.8	0	0
	0	0	0	0	4	19	10	47.6	7	33.3	0	0
21.保護者と信頼関係を構築している。	0	0	3	14.3	4	19	12	57.1	2	9.5	0	0
	0	0	0	0	5	23.8	13	61.9	3	14.3	0	0
22.自分の言動を常に振り返っている。	1	4.8	2	9.5	2	9.5	15	71.4	1	4.8	0	0
	0	0	0	0	3	14.3	10	47.6	8	38.1	0	0
23.どのような場面でもまわりの人と支え合うことができる。	0	0	0	0	4	19	15	71.4	2	9.5	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	15	71.4	4	19	0	0
24.生徒指導に関して、個や集団を指導するための手立てを理解している。	0	0	4	19	4	19	13	61.9	0	0	0	0
	0	0	0	0	4	19	15	71.4	2	9.5	0	0
25.学校内での人材育成の重要性を理解している。	1	4.8	1	4.8	5	23.8	10	47.6	4	19	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	10	47.6	9	42.9	0	0
26.危機管理の大切さを理解し、且つ危機の未然防止に努めている。	0	0	1	4.8	8	38.1	8	38.1	4	19	0	0
	0	0	0	0	6	28.6	13	61.9	2	9.5	0	0
27.組織の一員としての自分の役割を理解している。	0	0	1	4.8	3	14.3	15	71.4	2	9.5	0	0
	0	0	1	4.8	2	9.5	15	71.4	3	14.3	0	0
28.地域・関係機関等と連携協働のネットワークを形成している。	2	9.5	4	19	8	38.1	7	33.3	0	0	0	0
	0	0	2	9.5	10	47.6	9	42.9	0	0	0	0
29.沖縄県の教育課題を理解している。	1	4.8	1	4.8	7	33.3	12	57.1	0	0	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	16	76.2	3	14.3	0	0
30.校内においてリーダー的な役割を果たしている。	2	9.5	3	14.3	10	47.6	6	28.6	0	0	0	0
	3	14.3	3	14.3	6	28.6	9	42.9	0	0	0	0
31.高い専門性を有している。	3	14.3	5	23.8	7	33.3	5	23.8	1	4.8	0	0
	1	4.8	1	4.8	4	19	15	71.4	0	0	0	0
32.学校経営に参画する意識を強くもっている。	0	0	6	28.6	5	23.8	9	42.9	1	4.8	0	0
	0	0	0	0	6	28.6	13	61.9	2	9.5	0	0
33.基本的生活習慣やルール、マナーなどについて、積極的に指導している。	1	4.8	1	4.8	3	14.3	11	52.4	5	23.8	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	13	61.9	6	28.6	0	0
34.異なる意見・立場を尊重し、職務にあたっている。	0	0	3	14.3	2	9.5	13	61.9	3	14.3	0	0
	0	0	0	0	3	14.3	8	38.1	10	47.6	0	0
35.カリキュラム・マネジメントに強い興味関心がある。	1	4.8	3	14.3	9	42.9	7	33.3	1	4.8	0	0
	0	0	0	0	6	28.6	14	66.7	1	4.8	0	0
36.策定した指導計画を適切に実施している。	0	0	4	19	12	57.1	5	23.8	0	0	0	0
	0	0	0	0	6	28.6	15	71.4	0	0	0	0
37.常に、子ども同士の学び合いを意識して授業している。	0	0	1	4.8	8	38.1	8	38.1	4	19	0	0
	0	0	0	0	1	4.8	14	66.7	6	28.6	0	0
38.授業中、子どもの言動やワークシートから学習のつまずきを推察できる。	0	0	3	14.3	6	28.6	11	52.4	1	4.8	0	0
	0	0	0	0	3	14.3	14	66.7	4	19	0	0
39.自らの課題を見出し、自己成長のため努力している。	0	0	0	0	6	28.6	12	57.1	3	14.3	0	0
	0	0	0	0	2	9.5	9	42.9	10	47.6	0	0
40.学校外から多くの教育に関する情報を収集している。	1	4.8	3	14.3	6	28.6	7	33.3	4	19	0	0
	0	0	1	4.8	2	9.5	13	61.9	5	23.8	0	0
41.合理的かつ反省的に考えて問題解決しようとする意欲がある。												
	0	0	0	0	2	9.5	11	52.4	8	38.1	0	0
42.合理的かつ反省的に考えて問題解決しようとしている。												
	0	0	1	4.8	3	14.3	15	71.4	2	9.5	0	0
43.理論と実践を往還させながら教育実践を積み重ねようとする意欲がある。												
	0	0	0	0	1	4.8	14	66.7	6	28.6	0	0
44.理論と実践を往還させながら教育実践を積み重ねようとしている。												
	0	0	0	0	0	0	15	71.4	6	28.6	0	0

＊項目41～44については、修了時のみ質問

高等学校「言語文化」教科書調査を基にした「つながる」古典学習の研究

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻　２年
當間　比呂

１．課題意識について

本研究の出発点には、古典学習の意義がわからないという生徒や、他者との関係づくりに悩む生徒たちの姿がある。発表者は、古典分野の指導における知識獲得へのこだわりの強さが、学習者の「読みを通して『よりよく生きる術』を学ぼう」という学びに向かう意欲を削いでいると考えている。そこで本研究では、作品世界の人物や社会背景と自らを照らし合わせて人間や社会、その中に在る自身のことについて考えていく（＝「つながる」）ことによって一人ひとりが人生をよりよく生きられる社会で求められる「資質・能力」を育む、そのような古典学習について探究することとした。

高等学校では今年度より新学習指導要領が実施され、国語科では科目が見直されている。この変革期にあることを好機と捉え、授業者の意識改革を提案したい。

２．研究内容

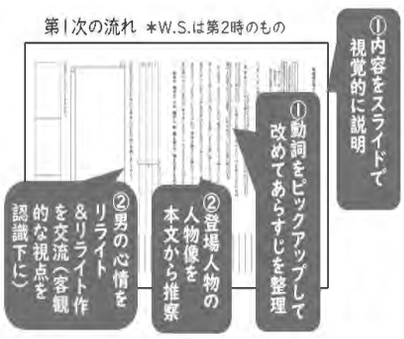
まず初めに行った、新共通必履修科目である「言語文化」の教科書調査では、検定教科書９社 17 冊の同社同系統教科書における旧新版間比較を行った。

そこで見えてきたこととしては、第一に学習者が作品の解釈を深める過程で様々な資質能力を育む言語活動が設定されていること、第二に時間的な制約のある中でどのように言語活動に取り組ませるかという点で工夫がなされていることである。特に後者については、学習の中で「つながり」を実感できるような言語活動を取り入れるにあたっても同様の工夫が求められるということで、重視すべき観点であると考えた。

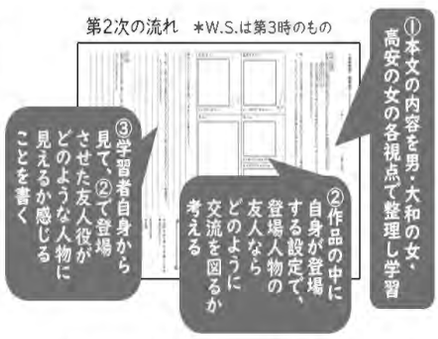
続く年間カリキュラム案の作成では、前項の教科書調査を踏まえて得られた観点等を踏まえて改めて体系的な学びの仕組みを構築する必要があると考え、１年を前・中・後期に分割し、各期の目標を設定した年間カリキュラム案を作成した。また、前中後期それぞれのまとめとして「書くこと」の活動を取り入れている。本稿では、その概要を紹介する。

想定される時期/各期末の単元	各期の目標/各期末「書くこと」の具体的な学習活動	学習教材例
前期（４月～７月）のねらい	学習者自身が作品世界に関わる人物との間につながりを見つける	・『宇治拾遺物語』 ・『羅生門』
前期のまとめとしての「書くこと」	１学期に学んだ作品との出会いを通して考えたことについて書く	・『伊勢物語』 ・『土佐日記』 ・故事成語
中期（８月～１２月）のねらい	学習者が作品世界に関わる社会との自身が生きる社会との間につながりを見つける	・「愛され過ぎた白鳥」（小川洋子） ・漢詩
中期のまとめとしての「書くこと」	２学期に学んだ作品の中で生きる「人」の在り方を頼りに、社会について考えたことを書き、交流する	・『平家物語』 ・『十八史略』 ・『徒然草』
後期（１～３月）のねらい	人間や社会、文化に対して自身の考えを持ち、表現することができる	・『枕草子』（「雪のいと高う降りたるを」と白居易）
後期のまとめとしての「書くこと」	身近なところで触れられる言語文化について、感じたこと考えたことを表現する	・「朝三暮四」の読み比べ ・「失われた両腕」（清岡卓行） ・和歌

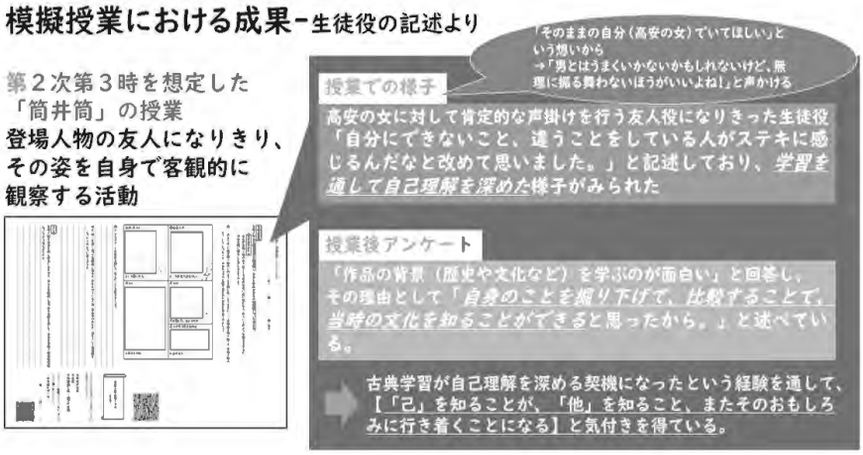
さらに本研究の検証のため、本学教育学部 3、4 年次を対象に２度の模擬授業実践を行った。高等学校第１学年の６月実施を想定した『伊勢物語』を扱う単元の第１次（2022 年 10 月）と第２次（2021 年 12 月）である。本単元は、第１次に「芥川」、第２次に「筒井筒」を扱い、「古典学習において人間の普遍的な姿を探る中でも自己理解を深める契機を得られる」という「つながり」観を育むことを目標とした。実践の流れは下図の通りである。



→作中人物に寄り添う視点で考える活動
（第1次 2時間構成/『伊勢物語』芥川）



→作中人物に「他者」として対峙し、対峙する「自己」を客観的な視点から見つめる活動
（第2次 3時間構成/『伊勢物語』筒井筒）



メタ認知的な視点に立って作中人物と自己とを並べ立てて「見る」活動は、本単元において育成したい「つながり」観の醸成に有用だと分かった（左図参照）。一方、ある生徒役の学習の様子を観察していたところ、生身の自己に切り込むような活動では自己否定を伴う深い反省につながる場面が見られた。その生徒役については、後の交流活動を通して最終的には活動に対して前向きな発言を残したが、実際の学校現場においてもこういった内面に切り込む活動後の交流の場の設定については、受容的で支持的な交流が行われるよう日頃から配慮する必要があると分かった。生徒の実態に即した手立てを講ずる必要があるだろう。

３．成果と課題

「言語文化」教科書調査では、筆者の目指す「学習者がつながりを感じられる古典（古文）学習が「言語文化」という科目の意図に合致し、教科書教材を使った学習活動と並行して行えること」、また「精選された学習活動と体系的なカリキュラムが必須であること」が分かった。さらに、それらを踏まえた年間カリキュラムの構想、模擬授業実践を行い、言語活動によって「つながり」観の育成が図れるということを検証できた。一方課題としては、実際の高校生を対象とした検証ができておらず、実の学習場面における支援の細かな手立てについては想定の範囲でしか行えなかったということが挙げられる。今後は、機会を得て実際の生徒の実態に鑑みつつ体系的な実践を目指し、より多くの学習者が有意義に感じられる古典学習の実現に向けて、「学習者と作中人物・作品世界をつなぎ、一人ひとりが『人生をよりよく生きる』資質能力を育むための古典の学びを創出する」授業を発信していきたい。

年間行事　２０２２（令和４）年度

４月４日オリエンテーション

４月５日入学式

４月１２日～課題発見実習Ⅰ、ⅠB

Ⅰ：附属小学校（６月３日、６月１６日、６月２０日）、附属中学校（４月２２日、５月６日、５月２７日、６月１０日）、沖縄盲学校（５月２４日、６月９日、６月１７日）、沖縄ろう学校（６月２４日、７月１日、７月８日）、泡瀬特別支援学校（５月１３日）、はなさき特別支援学校（５月２４日）、島尻特別支援学校（６月９日）

ⅠB：鏡が丘・森川特別支援学校（５月１３日、５月２０日、５月２７日、６月２０日）、沖縄盲学校（５月２４日、６月９日、、６月１７日）、沖縄ろう学校（６月２４日、７月１日、７月８日）

６月２日～６月１５日　授業相互参観

７月１７日　オープンキャンパス、Zoom で実施　申込者１９名　　参加者１６名

９月１日～課題発見習Ⅱ

前期：普天間中学校（９月１日～９月１４日）、中城南小学校校、大山小学校、志真志小学校、大謝名小学校校、宜野湾高等学校、西原高等学校、中部商業高等学校、大平特別支援学校（９月５日～９月１６日）、宜野湾中学校（９月１２日～９月２７日）

後期：宜野湾中学校、浦添商業高等学校（１月２３日～２月３日）、普天間第二小学校、大山小学校、大謝名小学校、宜野湾高等学校、西原高等学校、美咲特別支援学校（１月３０日～２月１０日）、志真志小学校、美東中学校（２月６日～２月１７日）

１０月１日　教育実践・研究交流集会〔ホームカミングデー〕　参加者４３名

１０月１５日　教職大学院入学考査試験

１２月５日 ～ １２月１６日　授業相互参観

１２月１０～１１日　日本教職大学院協会研究大会　発表者　當間比呂　院生

１月１７日　第２回教職大学院連携推進会議開催（第１回は５月に書面開催）

１月１７日　第３回連携協力校等連絡協議会（第１回は５月２６日にオンライン開催、第２回は１０月に書面開催）

１月２１日　教職大学院入学考査試験（二次募集）

３月１９日　第７回学修成果発表会（学外向け）

３月２３日　修了式

2022年度　実習連携協力校一覧

校種	学　校　名	住　所
小学校	琉球大学教育学部附属小学校	西原町字千原1番地
	中城村立 中城南小学校	中城村字南上原800番地
	宜野湾市立 普天間第二小学校	宜野湾市新城2-8-19
	宜野湾市立 大謝名小学校	宜野湾市大謝名5-12-1
	宜野湾市立 大山小学校	宜野湾市大山5-16-1
	宜野湾市立 志真志小学校	宜野湾市宜野湾3-5-1
中学校	琉球大学教育学部附属中学校	西原町字千原1番地
	沖縄市立 美東中学校	沖縄市高原5-12-1
	宜野湾市立 宜野湾中学校	宜野湾市赤道1-15-1
	宜野湾市立 普天間中学校	宜野湾市新城2-41-1
高等学校	県立 普天間高等学校	宜野湾市普天間1-24-1
	県立 宜野湾高等学校	宜野湾市真志喜2-25-1
	県立 西原高等学校	西原町字翁長610番地
	県立 中部商業高等高校	宜野湾市我如古2-2-1
	県立 浦添商業高等学校	浦添市伊祖3-11-1
特別支援学校	県立鏡が丘特別支援学校	浦添市当山3丁目2-7
	県立 大平特別支援学校	浦添市大平1-27-1
	県立 森川特別支援学校	西原町字盛河151
	県立 泡瀬特別支援学校	沖縄市比屋根5-2-20
	県立 はなさき支援学校	北中城村字屋宜原415
	県立 沖縄ろう学校	北中城村字屋宜原415
	県立 沖縄盲学校	南風原町字兼城473
	県立 島尻特別支援学校	八重瀬町字友寄160
	県立 美咲特別支援学校	沖縄市美里4-18-1

令和４(2022)年度　高度教職実践専攻会議構成員以外の授業科目担当一覧

１．選択科目

科目名	履修学生	担当教員	備考
授業実践力向上の基礎	高度教職実践専攻 １年次（学年院生）	教育学部　家政教育講座 准教授　土屋　善和	教職実践講座 教授　道田　泰司 准教授　多和田　実 教職センター 准教授　上原　正人 准教授　神里　美智子 と共同
国語科教育の理論と実践の高度化Ⅰ	金城　薫	教育学部　国語教育講座 准教授　高瀬　裕人	
数学（算数）科教育の理論と実践の高度化Ⅰ	新城　喬之	教育学部　数学教育講座 准教授　山城　康一	
数学（算数）科教育の理論と実践の高度化Ⅱ	新城　喬之	教育学部　数学教育講座 准教授　山城　康一	
音楽科教育の理論と実践の高度化Ⅰ	大城　あやの 金城　貴裕 上間　里佐	教育学部　音楽教育講座 教授　小川　由美	
音楽科教育の理論と実践の高度化Ⅱ	大城　あやの 金城　貴裕 上間　里佐	教育学部　音楽教育講座 教授　小川　由美 准教授　村田　昌己 准教授　持松　朋世 講師　西村　幸高	
保健体育科教育の理論と実践の高度化Ⅰ	渡邉　裕樹	教育学部　体育教育講座 准教授　江藤　真生子	

２．必修科目

科目名	履修学生	担当教員	備考
教育課程編成の課題と実践	高度教職実践専攻 １年次	教育学部　学校教育講座 准教授　塚原　健太	教職実践講座 教授　吉田　安規良 准教授　比嘉　俊 と共同
課題研究Ⅱ	金城　薫	教育学部　国語教育講座 准教授　高瀬　裕人	
課題研究Ⅲ 課題研究Ⅳ 課題解決実習	砂川　誠智	教育学部　理科教育講座 教授　濱田　栄作	
	玉城　貴子 呉屋　美穂	教育学部　学校教育講座 教授　上地　完治	

	長元　智	教育学部　国語教育講座 准教授　高瀬　裕人	
	當間　比呂	教育学部　国語教育講座 教授　萩野　敦子	
	宮里　未希	教育学部　音楽教育講座 教授　小川　由美	
	諸喜田　峰子 名冨　綾乃	教育学部　国語教育講座 教授　村上　呂里	

※非常勤講師を除く琉球大学の専任教員のみ掲載

令和４年度実習指導一覧

本教職大学院においては，学習指導場面，生徒指導場面，組織運営場面という沖縄県の課題に関わる各場面において合理的かつ反省的に考えて問題解決ができる人材を育成することを目的の一つとしている。そのため，「課題発見実習Ⅰ/IA/IB・Ⅱ」と「課題解決実習」及び「インターン実習」における実習参観及びリフレクション並びに実習校との事前調整等のため，学校訪問を行っている。

なお，学校訪問の回数は次のとおりである。

氏　名	回数	備　考
道田　泰司	19	
杉尾　幸司	12	専攻長
田中　洋	15	
吉田　安規良	23	
上間　陽子	6	
丹野　清彦	14	
下地　敏洋	22	
浦崎　武	16	
白尾　裕志	15	
金城　満	10	
藏滿　逸司	18	
村末　勇介	24	
比嘉　俊	20	
城間　園子	45	
多和田　実	29	
上原　正人	17	人事交流
神里　美智子	38	人事交流
高瀬　裕人	6	教育学部所属
合　計	349	

（令和５年２月２６日　現在）